

初級中国語授業におけるシャドーイングと プレゼンテーションの連携によるスピーキング指導に関する実践

祝 利¹ 坪田 康²

¹九州大学 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 番地

²京都工芸繊維大学 〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町

E-mail: ¹syukuri_234@yahoo.co.jp, ²tsubota-yasushi@kit.ac.jp

あらまし グローバル化の進展に伴い、大学の外国語教育は外国語の運用能力の涵養と向上を主要目標としている。しかし、大学の初級中国語を修得した学習者でも「言いたいことが言えない」、つまり、スピーキング力が十分ではないという問題が普遍的に存在している。本稿では、初級中国語授業にシャドーイングとプレゼンテーションを中心としたスピーキング活動を導入し、その実践を通して、2 つの手法の組み合わせにより、学習者のスピーキング力の向上にいかなる効果をもつのかを考察する。

キーワード 初級中国語, スピーキング, シャドーイング, プレゼンテーション

Introduction of speaking activities with shadowing and presentation in introductory course of Chinese language

Li ZHU¹ Yasushi TSUBOTA²

¹ Kyushu University, 744 Motooka Nishi-ku, Fukuoka 819-0395

² Kyoto Institute of Technology, Hashikamicho, Matsugasaki, Kyoto, 606-8585

E-mail: ¹syukuri_234@yahoo.co.jp, ²tsubota-yasushi@kit.ac.jp

Abstract With the advance of globalization, the main aim of foreign language education in universities is set to foster practical skills of the language. But, in reality, so many students who finish the introductory course of Chinese, often say they can't say what they want to express. They think their ability to speak Chinese is not enough. In this paper, we report the practice in the introductory course of Chinese in a university, in which we combine shadowing practice with presentation and then think about the effect of it.

Keywords Introductory course of Chinese, Speaking, Shadowing, Presentations

1. はじめに

グローバル化の進展に伴い、大学教育は従来の受動的な教育を改め、学生の能動的かつ継続的な学習能力の育成に重点を置くようになった。特に外国語教育においては、異文化への理解とともに、外国語の運用能力の涵養と向上が教育の目標とされている。こうした中、中国語教育の一環として、初級学習者向けの短期留学・語学研修のプログラムが制定され、実施されている。しかし、中国大陸・台湾に留学した初級中国語学習者の経験談を精査すると、「中国語の授業を受けて

きて文法の理解はできていても、それらを使って自分の思いを伝えるということは本当に難しい」、「言いたいことがなかなか出てこない」のような記述が屡々見受けられる。大学で中国語を1年間学習しても、スピーキング力が不十分であると感じていることが分かる。

スピーキングの指導に関する研究は、英語や日本語教育分野で多くの蓄積があるが、中国語教育の分野では、音声(馮(2007)、平井(2012)など)、文法(荒川(2015)など)、談話分析(劉(2015)など)などの研究はあるものの、学習者のスピーキング力に注目するものは少ない。

曲(2016)は日本人中国語学習者の学習過程に注目し、スピーキングテスト及びその評価尺度を作っているが、研究対象は中上級の学習者であり、初級については言及されていない。

奥水(2005)は中国語のスピーキング指導について、学習者側の問題点として①発音への不安、②語彙の不足、③文法ミスへの不安と④話題のなさの4つを指摘している。この指摘により、スピーキングを指導する際、学習者自身に内在した「語彙と文法」の知識と「外国語不安」の2つの障壁を取り除かなければならないとしている。初級中国語授業においていかにして学習者の語彙量や文法知識を安定させ、外国語不安を除き、つまり、「言いたいことが言えない」という普遍的に存在する問題を解決し、学習者のスピーキング力を高めるのかについて検討することが重要である。

本研究では、第二言語習得に密接に関係する「インプット」と「アウトプット」理論の仮説に基づいて、これまで英語教育や日本語教育に多く実践されているシャドーイングとプレゼンテーションの手法を初級中国語の授業に取り入れ、その組み合わせが初級中国語学習者のスピーキング力の向上にいかなる効果をもつのかを検討する。

2. 理論的背景

2.1. インプット仮説とアウトプット仮説

第二言語習得のメカニズムを巡って、さまざまな仮説が立てられ、その実証研究が行われてきた。Krashenにより提唱されたインプット仮説は学習者が自分の中間言語(interlanguage)より少し進んだ要素を含む言語(i+1)(少し高いレベルの言語)を与えられると周囲の状況や文脈などの助けによりその意味を理解でき、それによってL2習得が進むという理論である(佐野,2005)。しかし、理解可能なインプットだけでは文法的に不正確な言語表現を使用する学生を生み出すため、理解可能なアウトプットも重要視されるようになってきた。言語を産出することによって、学習者は自分の中間言語で言えることと言えないことのギャップに気づき、その結果、インプットへの注意が促される気づき機能を生み出すと指摘されている(佐野,2005)。このように、インプットだけではなく、アウトプットも第二言語習得において必須条件として認識されている。

2.2. シャドーイングとプレゼンテーション

シャドーイングとは聞こえてきた音声をもとに、こころ(頭)の中で内的な符号化を行い、どのような発音であるか認識し、その後、それを声に出して発声するタスクである(門田,2011)。これまで、英語教育や日本語教育において数多くの実践研究によって、シャドーイングの導入により、学習者のリスニング力を高め、

発話速度の向上、英語音素の調音、また学習者の発話量と質の向上に効果があることが指摘されている(飯野,2014)。中国語教育分野においては、趙(2009)では、初級中国語授業にシャドーイングの手法を導入し、アンケート調査を通して、シャドーイングが学習者の「中国語に対する戸惑いを解消する」、「中国語のリズム、抑揚を身につける」、「意味理解」を促し、「集中力」や「やる気」を高めることに役立つと指摘している。また、張(2017)では、持続的なシャドーイングの導入が学習者の声調の習得に効果があると指摘している。しかし、シャドーイングは学習者のスピーキング力にいかなる影響があるのかについては触れていない。

門田(2011)では、日本人英語学習者を対象者にした実験研究を通して、シャドーイングに以下のような新たな効果が潜在的に存在していると指摘している。①シャドーイングは学習者の発音スピードを速くし、それによって、使われている語句や構文の記憶・再生がよくなる。その理由としては、音韻ループ内の内語反復の速度の向上により、その記憶容量が拡大するからであると解釈している。②シャドーイングはスピーキングのための内的発話(リハーサル)を促進する可能性がある。この新しい研究発見により、初級中国語授業にシャドーイングの練習を取り入れれば、学習者がスピーキングを行う際に存在する「文法・語彙」に関する不安を解決することが期待できる。

しかし、築山(2013)では、シャドーイングによる言語知識(語彙・構文)の内在化は全ての言語知識が内在化されるわけではなく、そこに学生が必要と考える表現であるかどうかの影響する可能性があること、言語知識の内在化には、シャドーイングだけではなく、さらなるアウトプットのタスクが必要であると指摘している。したがって、本研究では、シャドーイングの手法を取り入れる上に、「聴く・話す・読む・書く」の4技能の総合型活動と評されるプレゼンテーションをアウトプットタスクとして導入する。

プレゼンテーションは、自分の問題意識を人に伝え、人とのインタラクティブなやり取りによって、自らの学びを獲得する過程である(武末,2019)。これまで、プレゼンテーションは英語教育、日本語教育また中国語教育で多く実践されており、学習者が自信をつけ、外国語に対する好感度を高め、また、話す力を高める効果があると指摘されている(藤田・山形・竹中,2009)。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、学習者のスピーキング力に関わる①語彙・文法不足と②外国語不安の問題を解決するために、学習者のスピーキング力を高めるために、初級中国語授業にシャドーイングとプレゼンテーションを取り入れ、その実践を通して、2つの手法の組み合わせが学習者の中国語力、特にス

スピーキング力の向上に対していかなる効果をもつのかを検討する。実践の構図は以下のとおりである。

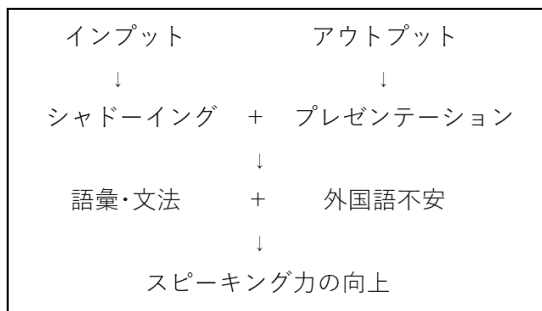


図1 実践の構図

3. 初級中国語授業におけるスピーキング活動

2018年5月から2019年2月まで、前期と後期に分けて初級中国語クラス(36人)にシャドーイングとプレゼンテーションを中心としたスピーキング活動を実施した。シャドーイングは授業内容の一部として、計20回行い、プレゼンテーションは前期と後期の期末テストとして2回実施した。学習者のプレゼンテーションに対して、加藤・祝・坪田(2013)に基づいて、自己評価・ペア評価・母語話者(教師・教室外の母語話者)による3者評価を行った。また学習者にとって、前期と後期のスピーキングの活動は効果があるかどうかを分析するためにアンケート調査を実施した。

クラスは第一著者と中国人教師がペアで、週1回ずつリレー式で担当した。ペアの中国人教師が文法の説明を中心に担当し、第一著者が主に教科書の会話文の説明と練習を担当した。授業に使用する教材は『ビデオで学ぶ入門中国語一年生のころ』(朝日出版社)である。この教材は日本での大学生活を背景とし、食堂や図書館、アルバイト先などの場面において中国人留学生と日本人中国語学習者との会話を中心となっている。教材の構成及び場面設定は表1に示すとおりである。

この教材には、DVDが付属しており、主人公3人の会話をリアルタイムで鑑賞することができる大きな特徴である。ビデオの構成は①字幕なし会話②中国語字幕付き会話③文法ポイント④会話文に関するQ&A⑤日本語字幕付き会話⑥10人1句(年代別、男女別の10人より1フレーズを10回リピートする)の6つの部分からなる。中国語字幕あり・なしの構成となっていたため、シャドーイングを導入する際に非常に役立った。

表1 教材の内容構成

	テーマ・場面	語法ポイント
第1課	出会い	①姓・名の言い方 ②「是」構文
第2課	ガールフレンド	①指示代詞 ②「的」 ③疑問詞
第3課	ランチ	①動詞述語文 ②「喜歡」+VP ③反復疑問文
第4課	3人で	①形容詞述語文 ②助動詞「想」 ③連動文
第5課	テストの成績	①比較文 ②助動詞「要」
第6課	二人でデート	①年齢の言い方 ②「有」構文 ③「在」構文
第7課	あくる日	①年月日の言い方 ②時刻の言い方 ③主述述語文
第8課	ライバル登場?	①動詞につく「了」 ②進行の表し方 ③数詞・金
第9課	バースディプレゼント	①量詞 ②結果補語 ③「～着」
第10課	デニス	①「会」 ②「可以」 ③時量
第11課	ギョーザ作り	①二重目的語 ②「過」 ③「得」
第12課	パソコン談義	①可能補語 ②能 ③常用の副詞
第13課	電話	①程度補語 ②「把」構文 ③「让」
第14課	お見舞い	①存現文 ②有点儿
第15課	春休みの計画	①「是...的」 ②会
第16課	旅たち	①方向補語 ②兼語文

3.1. 前期授業中のシャドーイング活動

シャドーイング活動を取り入れた授業の流れは図2が示すとおりである。

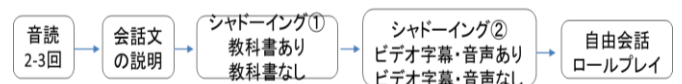


図2 シャドーイングを取り入れた授業の流れ

授業の冒頭で、文法の復習と新出単語の確認をした後、リピーティングの形で教師について会話文の音読を行う。教師が読むスピードを調整しながら学習者の発音を訂正し、文の区切りなどに注意を向けさせる。本文を流暢に読めるようになってから、本文の説明を行う。内容を十分理解したと確認後、シャドーイング練習に移る。1回目と2回目では教科書を見ながら、教師の後に1秒ほどの間隔を置いてすぐ読む。その際、学習者の様子などを鑑み、教師が読むスピードを調整したり、発音しにくい部分また長文を数回にわたって繰り返して読んだりする。その後、DVDのビデオを鑑賞する。ビデオの音声は中国人が普通に会話するときのスピードであるため、中国語初心者にとってはやや速い。実際の中国人の話すスピードに慣れるために、中国語字幕付きのビデオを見ながら音声についてシャドーイングを2回する。その後、ビデオの音声を消し、学習者に字幕なしの画面を見せながら、会話文の復唱をさせる。音読とシャドーイング練習終了後、3～4人でグループを組んで、教科書の会話文に類似する場面を設定し、学習者に自由会話を作らせる。会話をグループ内で練習後、クラスの前で発表する。学習者が練習または発表する時、その発音や文法の誤りなどに対し、教師は随時フィードバックを行う。

3.2. 前期のプレゼンテーション活動

前期の期末テストとしてプレゼンテーション活動

を行った。プレゼンテーション活動は①簡単な自己紹介と②文章の音読の2つの部分からなる。自己紹介は学習者がこれまで習ってきた文型と語彙を利用して作った内容である。テストの時に学習者は原稿なしで発表する。音読に使用する文章は教科書の内容に関連する60～70字の読物である。テスト当日に学習者に配布する。プレゼンテーション活動の全課程を録画する。

加藤・祝・坪田(2013)によると、客観的に評価を行うために、自己・ペア・母語話者による3者評価が相互補完的にはたらき、効果があると指摘している。この理論に基づいて、本研究の評価は、学習者の発表に対して、グループメンバーによる評価と母語話者(教師・教室外の母語話者)による評価、アンケート調査を通じた自己紹介の3つから構成した。なお、教師と母語話者による評価は、校内に年一度に行われた中国語コンテストの評価基準に基づき作成した。評価項目としては、①「発音」：普通話の正しい発音ができているか、中国語として自然か、②「内容」：自分の考えや思いを伝えられるか、③「伝達力(流暢さ)」：声の大きさ、間合い(ポーズ)、声への感情の込め方、④「非言語表現」：表情やパフォーマンス、発表の工夫、個性の発揮の4つを設定した。それぞれの項目に5点満点で点数をつける形である。教室内活動終了後、そのビデオを教室外の母語話者にみせ、母語話者による評価をしてもらう。教室外母語話者による評価と教師による評価を合わせたものが学習者の期末テストの成績とした。グループメンバーによる評価は発表者と他の学習者との意見交換に使うために用い、期末テストの成績には組み込まないこととした。

テストを開始する前に36人の学生をランダムに6つのグループに分けた。アイスブレイクとして、グループメンバー全員が名前や出身、趣味などについて話し合わせた後、1人ずつ自己紹介と文章の音読を行い、グループメンバーと相互に評価させた。グループメンバーによる評価には下記の表2に示すものをワークシートとして利用させた。

表2 グループメンバーによる評価表

	一人目	二人目	三人目	四人目	五人目
名前					
出身/専攻					
好きなことは何ですか？ (キーワード)					
今したいことは何ですか (キーワード)					
面白かったですか(A:もっと話が聞きたいB:そこそこ面白いC:面白くない)					
文法、発音、声調はできていましたか？(A:できていたB:やや課題が残るC:出来てない)					
良かったところ、真似したいところ					
改善が必要なところ					

評価表に「よかったところ」、「真似したいところ」と「改善すべきところ」の項目を設けており、グループメンバーは発表者の発表に対して、意見やアドバイスを自由に記入する。学習者は発表後、グループメンバーからのフィードバックに基づき、練習を繰り返し、最後に教師の前で2つの内容を発表し、教師に評価してもらう。

3.3. 前期スピーキング活動の結果について

本節では、実例を紹介しながら、学習者のプレゼンテーションに対して行われたグループメンバーによる評価、母語話者(教師・教室外の母語話者)による評価、自己評価を含むアンケート調査の結果についての分析をまとめる。

3.3.1 グループメンバーによる評価

グループメンバーによるコメントを教師・母語話者による評価の基準に照らし合わせて、表3が示す4つの面に分けることができる。

(1)よかったところ、真似したいところ

表3 前期グループメンバーによる評価(1)

	記述(引用)
発音・声調	四声の言いわけがうまかった
伝達力	・スピード一定だった ・声が大きい ・はっきり言っていた ・しっかり文を区切っていた ・聞き取りやすかった
内容	・授業で習った要素を沢山入れていた。 ・文章構造
非言語表現	・笑顔で話していた ・自信をもって読めていた

表3が示すように、伝達力に関する記述が最も多い。中国語を4ヶ月学習していた学習者は他人の発表を聞く際、最も注目する部分が速度(流暢さ)、声の大きさ、文の区切りなどであることがわかった。

(2)改善が必要なところ

表4によると、学習者に存在する問題点は非言語表現の部分にある。特に発表者の表情、視線、元気かどうか、つまり発表する際の様子がよく観察されることがわかった。また、発音が上手な学習者から発音に関する具体的な指摘もある。さらに、その他の記述から、学習者は他人の発表を聞く時、集中する様子が想像できる。

表 4 前期グループメンバーによる評価(2)

	記述(引用)
発音 声調	・発音がはっきりしないところがあった ・声調 Wo 第三声 Shi 捲舌音
伝達力	・声が小さかった ・速かった ・少し詰まるところがあった
内容	なし
非言語 表現	・笑顔が大事 ・アイコンタクト ・恥ずかしがる ・元気がない、心を込めていない ・間違っではいけないと思いきる
その他	・自分より優れているところが多くて改善点をもつける余裕がなかった

3.3.2 アンケート調査について(自己評価含む)

アンケート調査のそれぞれの質問項目について、学習者がいかに答えたのかについて見ていく(アンケート用紙は付録資料1を参照)。

(1)中国語で話すことに対してどのような感情を持っているか。

表 5 中国語に対する感情(数字は人数)

楽しい	わくわく	緊張	不安
14	4	11	3
面白い	自信がない	難しい	慣れない
1	1	1	1

表5が示すように、36名の回答者のうち、約半数の学習者が中国語を話すことに、「楽しい、わくわく」と評している。しかし、約半数の学習者は「緊張・不安・自信がない」と評している。具体的に何に対して「緊張・不安」を感じたかを調べると、「発音、声調、また伝わるかどうか」の3点が挙げられていた。

(2)中国語で話せるようになるための方法

スピーキング力を高める方法について、表6が示すとおり、学習者は主に発音と発話の2つの面から答えた。発音の面においては、繰り返して練習し、誰かに正してもらうことが重要だと指摘されている。また、発話の面においては、母語話者と話すのがよく挙げられ、ネイティブの人から自然と習得するという意欲が窺える。

表 6 中国語を話せるようになる方法(前期)

	記述(引用)
発音	・口を使って発音する。口で覚える。 ・何度も繰り返し発音を繰り返す ・いろいろな文を読んで発音を正してもらう ・文を作る、平行して発音
発話	・本物の中国人と話すこと ・Language Partnerを見つける ・中国人と会話する ・沢山話す
その他	・単語を覚える ・継続的に触れていく

(3)活動の感想

- ・緊張した
- ・いろいろな人の発表を聞けて、自分に足りないものが見えてきた。
- ・自己紹介もできたし、ちょっとは中国語が話せるようになったと実感できてうれしい。
- ・テストとなると緊張してしまった。もっと自信を持てるようになりたい。
- ・聞き取るのが難しい

グループ(3人～4人)による発表は普段の授業で毎週のように行っていたが、1人でグループ全員に対してプレゼンを行い、他のメンバーにコメントしてもらう形ははじめてである。上記のコメントから、グループの中でプレゼンすることを通して、他人の発表を聞くことができ、他人の優れた点や誤りに気づき、さらにその気づきを自分自身の発表に活かせるという効果があったことが見てとれる。また、学習者が「中国語で話せた」という達成感や自信ありげな様子も伝わってきた。

3.3.3 母語話者による評価を合わせた結果

本節では、グループメンバーによる評価とアンケート調査に母語話者による評価を合わせて、前期のスピーキング活動の結果についてまとめる。

(1)問題点

①話すことに対する「緊張・不安」の存在：中国語で話す時の感情について約半数の学習者が「緊張」や「不安」を挙げている。特に中国語の発音、声調及び話した内容が伝わったかどうかに関する不安である。その不安や自信のなさが他のメンバーにも伝わり、グループメンバーによる評価の中にも「自信がない、心配しすぎ」のような記述がみられる。

②声が小さく、アイコンタクトがない：グループメンバーによる評価と母語話者による評価の双方で指摘されており、その理由として本人は「高校以来、人の前

で発表することがあまりない」としていた。

③**文章の音読が流暢ではない**：母語話者による評価でよく取り上げられていた点である。音読に使用した文章は教科書の内容に関連する読物である。漢字に読み方を表す「ピンイン」が付されているものの、未習の語彙があったり、長文であったりするため、学習者にとって発音と文の区切りがやや難しいものと思われる。また、練習不足も音読が流暢ではないことの要因の一つであると考えられる。

(2)良いところ

①**自信をつけられた**：学習者はプレゼンテーションを行う際、「緊張や不安」を感じていた。その一方で、中国語で発表することを通して、「中国語が話せるようになったと実感した」という記述から分かるように、自分自身の言葉で中国語を話す自信がついた学習者もいたようである。

②**学習者の間の協同学習を促した**：グループメンバーによる相互評価を通して、学習者間の交流ができ、相手の良い点や改善点について話し合うことができた。双方の良い点や改善点を次の発表に活かすことができた。これによって、学習者同士の協同学習が促進された。

(3)**共通の誤り** 約4か月間の学習を通して、学習者の中国語力は、文法においてはほぼ同じ水準に達していたが、発音と流暢さに差がついていた。母語話者、グループメンバーによる相互評価の双方で、発音上の共通の誤りが指摘されている。例えば、声調の区別ができていない、また、捲き舌音と声調を正確に発音できていないという点である。

(4)**中国語の話す能力を高めるためには**：多くの学習者が「口を使って声を出して繰り返して、練習する」とことと、「ネイティブの人と話す」ことを挙げている。中国語母語話者が少ないという環境の中で、いかに中国人と話す量を増やすかは課題であるが、今回の授業で実施してきたシャドーイングとプレゼンテーションの組み合わせは一つの有効な解決法ではないかと考えている。

3.4. 後期のスピーキング活動

前期のスピーキング活動の結果を踏まえ、後期においては、①学習者の発音に共通に存在する「捲き舌音」と「声調」の問題を解決するため、音読とシャドーイングの練習により多くの時間を割くようにし、シャドーイングの手法を通して学習者がアクセントと発音を自然と身につけるように指導した。②学習者がロールプレイを行う際、話す音量や視線、非言語表現などに注意させ、より自然な会話ができるように指導した。

3.5. 期末のプレゼンテーション活動

前期と同様、後期の期末テストでもプレゼンテーシ

ョン活動を課した。後期のプレゼンテーションは①短いスピーチと②文章の音読の2つからなる。スピーチは、学習者の既習文型と語彙を考慮し、テーマを「将来の私」、「私の故郷」と「私が好きな〇〇(場所・もの等)」の3つとした。学習者は3つのテーマから1つを選択し作文をする。作文の内容は事前に教師によるネイティブチェックを行う。テスト当日に発表者が作文の内容を暗唱して発表する。音読に使用した文章は、年度末に校内で行われた1年生向けの中国語コンテストに採用された中国文学作品の一部分である(80字前後)。音読用の文章はテスト当日に学習者に配布した。

プレゼンテーション活動の当日、前期と同じように、クラスの36人をランダムに6つのグループに分けた。学習者はまずグループの中でスピーチと文章の音読を行い、グループメンバーから評価してもらう。グループメンバーからのコメントを参考に練習し、その後、教師の前で発表し、教師に評価してもらう。学習者と同じような臨場感を与えるために、教師の前で発表する際にのみタブレットで録画する。発表終了後、学習者の自己評価を含んだ後期のスピーキング活動に関するアンケート調査を実施する。活動終了後、録画したビデオを教室外の中国語母語話者にみせ、教室外の母語話者による評価をもらう。

グループメンバー、教師及び母語話者による評価の項目は前期と同じである。自己評価を含む後期のスピーキング活動に関するアンケート調査は付録資料2のとおりである。

3.6. 後期スピーキング活動の結果について

本節では、実例を挙げながら学習者のプレゼンテーション活動に対して、グループメンバーや母語話者(教師・教室外の母語話者)はいかに評価したのか、及び自己評価を含んだ後期スピーキング活動に関するアンケート調査の結果についてまとめる。

3.6.1 グループメンバーによる評価

(1)良かったところ、真似したいところ

表7に示されたコメントから、前期と比べ、中国語を8ヶ月学習した学習者は他人の発表を聞く際、一層内容に注目するようになった傾向を示している。発表者が故郷や好きなことについて紹介する時、その内容だけでなく、気持ちも聞き手に伝わり、発表自体は他人に影響を与える力を持っているといえる。また、伝達力の項目に、「速度が速い、流暢だ」という評価も屢々見られる。非言語表現においてもジェスチャーや表情が豊かになったといえる。

表 7 グループメンバーによる評価(1)

	記述(引用)
発音・声調	・単語が難しかったのに、よく読めた ・発音が良かった
伝達力	・声が小さかった ・速かった ・少し詰まるところがあった
内容	・内容が面白かった ・バスケの話が楽しそうだった ・料理の話がおいしそうだった ・山に興味がわいてきた ・ラーメンが食べたくなった ・自然豊かな岐阜の魅力が伝わった ・地元愛 ・広島への思いがよく伝わった
非言語表現	・家族旅行に行ってきた、インドに行くと言明するときのジェスチャー ・ちゃんと覚えて元気に発表していた ・身振り手振りがあった ・笑顔での発表がとても良い ・声の張り方 ・伝えようという意志がすごい

表 8 グループメンバーによる評価(2)

	記述(引用)
発音・声調	・ zhi、zhe、riなどの発音
伝達力	・声が小さい ・文と文の間 ・なめらかさがかけている ・スピード ・読みリズム
内容	なし
非言語表現	・表情 ・笑顔が足りない ・ジェスチャーをすればもっと良かった ・もっと自信を持って ・アイコンタクトがあると良いと思う ・めげない心

(2)改善が必要なところ

表 8 が示すとおり、前期に引き続き「声が小さい、表情、自信がない」のような問題がある。また、前期と比べ、「声調」の指摘がほとんどなく、「捲き舌音」に関する指摘が多くなった。伝達力の項目に最も指摘されているのは流暢さである。プレゼンは暗記することが求められたが、発表日はちょうど後期の試験期間中にあるため、他の科目の復習などによって、暗記できていない、または流暢ではない学習者は少なくなかった。

3.6.2 アンケート調査について(自己評価含む)

アンケート調査の質問項目に対して、学習者による回答は以下のとおりである。

(1) 本日の発表についての感想

表 9 が示すように、学習者から流暢さに心残りがある

という感想が最も多い。発表者自身の発音について、自己評価で賛否両方もある。しかし、発表に対して「緊張」という表現は大幅に減少した。

表 9 後期の活動についての感想

	記述(引用)
発音 声調	・四声をもうちょっと頑張りたい ・発音をもう少し気を付けたらよかった ・発音が思ったよりきれいにできたので良かった
伝達力	・もっと流暢には話せたのに・・・ ・もう少し暗記できれば良かった ・単語の意味を1つ1つ確認しながら発表したら、すらすら言うことができなかった ・話すスピードをもうちょっと速くしたい ・先生に褒められたので、95点。もっとすらすらいえとよかった
その他	・緊張した ・緊張して全部飛んでしまった

(2)中国語の授業ではスピーキング練習が十分か、その理由は？ (A：十分である B：普通にできた C：できていない)

表 10 後期スピーキング活動が十分か

	記述(引用)
A 25/36(人)	・授業中いっぱい文を暗記することで文と一緒に単語を覚えることができたから ・週1で会話の練習ができたから ・カンパセーションを多く入れてくれたから ・とても多く会話を練習した ・同じ文を何度も読んで早く読めるようになったから ・教科書の本文を言いまくって、テスト前で暗記する必要がなかったから
B 9/36(人)	・毎週発表して、普通にできた ・各課発表練習があるから ・十分かはわからないが、練習できてよかった
C 1/36(人)	・自分はまだスピーキングに不安があるから

表 10 が示すように、これまでのスピーキング活動に対して、クラスの約 4 分の 3 の学習者が「A 十分である」と評価している。その主な理由として、授業中の読む活動と会話練習をすることを通して、文と単語を覚えることができたからと理由を挙げている。さらに、テスト前に暗記する必要がないほど覚えたという記述もある。ここから、シャドーイングを中心とした読む練習を通して、文や語彙に対して、長期的に記憶する効果がある可能性が示唆される。しかし、クラスの中には発表に対して強い不安を持つ学習者もまだいることも事実である。

(3)前期より上達したところは？

「聴く・話す・読む・書く」の中国語の 4 技能のうち、どの技能が上達したかという質問に対し、学習者の回

答は表 11 のとおりである。

表 11 前期より上達した部分

	記述(引用)
聞く	・全体的に聞いたり書いたりするのが上手になった
話す	・伝えられることが増えた ・発音がうまくなった ・話すとき止まらなくなった ・自分が表現したいことを中国語で言えるようになった ・単語が出てくるようになった
読む	・読み書きがスムーズになった ・読むときにいろいろな単語や文法を覚えたので少しだけ意味が分かるようになった ・読むのが早くなった ・難しい文章を読めるようになった
書く	・書くことはちょっと上達した ・作文を書くにしても、いろいろな表現が辞書を使わずにかけられるようになった ・文を書くことができるようになった
その他	・語彙力が上達した ・聞き取れる単語が増えた ・すべてにおいて上達した ・知っている文法と単語が増えたので話す・聞く・読む・書くのどれも上達したと思う

表 11 が示すように、「聴く」より、「話す・読む・書く」に関する回答が多い。「読むのが速くなり、難しい文章を読めるようになった」。また、「書く」ことについては、表現力が豊かになったという記述もある。さらに、「話す」ことについては、「伝えられることが増えた」、「話す時止まらないようになった」など、中国語を以前に比べて自由に駆使できるようになった一面を見せている。そのほか、全体的に上達したと評する学習者も数人いた。

(4) 中国語を話す能力を高めるには？

表 12 中国語を話す能力を高める方法（後期）

	記述(引用)
聞く	・映画やドラマを学習すること
話す	・実際中国語で話すこと、話す回数を増やす ・スピーキングの機会を増やす ・会話の例文を暗記して発表する
読む	・文章をたくさん読む ・とにかく声を出してよむこと
その他	・文法・単語を覚えてそれを使うこと ・日頃から中国語ではどのようなだろうと意識したい

中国語を話す能力を高める方法を見直す際、前期は「多く読む、ネイティブの人と話す」という答えが多かったが、中国語を学習して 8 ヶ月が経った後期の回答では、表 12 が示すとおり、「多く読む」は相変わらず多く挙げられているが、「話す」については、「スピーキングの機会を増やす」、「発表する」という表現に変わった。ここから、プレゼンテーション活動はすで

に学習者に受け入れられ、スピーキングへの効果が学習者に認められたものと考えられる。

3.6.3 母語話者による評価を合わせた結果

本節では、グループメンバーによる評価、自己評価を含んだアンケート調査結果に、母語話者による評価を加え、後期のスピーキング活動の結果についてまとめる。

(1) 外国語不安の緩和：前期のスピーキング活動の効果に関するアンケート調査では、「不安」や「緊張」に関する記述がクラスの約半数を占めていたが、後期の調査では、このような記述はまだ存在しているものの、前期より大幅に減少していた。

(2) 読み・書きとともにスピーキング力が上達した：学習者による自己評価の中に、「読むスピードが速くなった」、「文章の表現力がつけられた」という読み書きに関する評価があった。スピーキング力については、「伝えられることが増えた」、「いろいろなことが言えるようになった」、「自分が表現したいことを中国語で言えるようになった」など、学習者が自分自身の上達ぶりを感じ取った表現が屢々みられた。ここから、スピーキング活動を通して、学習者は「言いたいことがいえる」ようになったという効果が見られた。

(3) 学習者が自信をつけた：前期と比べて、後期のテストでは、学習者が自信に満ちて中国語を駆使して話していたと母語話者が評価していた。そのうち、「接続詞や四字熟語を積極的に使用する学習者がかなりいる」とも述べていた。接続詞と四字熟語の使用は実際、中上級の学習者に求められる中国語力の一部でもある。

(4) 語彙と文法の記憶に長期的な効果がある：これまでのシャドーイングとプレゼンテーション活動の効果に関する調査で、学習者の 4 分の 3 が「十分である」と答えている。特に授業中の音読とシャドーイングについては、「本文を何度も読んで速く読めるようになった」、「(音読やシャドーイングで)本文を言いくるめて、テスト前暗記する必要がない」という記述があった。これらの記述から、授業中に大量な音読とシャドーイング活動を取り入れることにより、学習者が文章を読む際の流暢さが増し、発音や内容を自然に身につける効果があると考えられる。また、この効果は期末までの長期間にわたって継続することができたともいえる。

(5) 問題点

①前期と同じように捲き舌音や声調の正確さにまだ問題を残しているが、学習者自身がその間違いに気づくことができ、そして修正しようという姿勢が見られる。②発表する際、相変わらずアイコンタクトが足りないと指摘されている。③文章の音読については、「文の区切りがなく、ピンインにたよりすぎる」という点も指摘されている。文学作品を読む際、内容を十分理

解せずひたすら読むには、文の区切りを正しくできないことは考えられるが、声調の不正確さとアイコンタクトの足りなさから、普段の発音指導及びプレゼンテーションに関する指導はまだ十分ではないと考えられる。

4. 考察

初級中国語授業において、前期・後期にわたって継続的にシャドーイングとプレゼンテーションを中心としたスピーキング活動を取り入れることにより、学習者の声調と発音の正確さにまだ問題が存在しているものの、学習者の①中国語に対する不安が軽減され、②自信を持って流暢に話せるようになった、という先行研究で指摘されている効果がみられた。それ以外にも、シャドーイングとプレゼンテーションの導入により、③学習者の中国語スピーキング力が高まり、④学習者が習得した語彙・文法知識が長期記憶に貢献する効果を確認できた。しかし、これらの効果は偶然の結果なのか、それとも学習段階が上がったことによる自然な習得の結果なのか、原因を特定することはできていない。この問題を解決するために、スピーキング活動を取り入れていない統制群クラス(40人)との比較を行った。

統制群のクラスと実験群のクラスの担当は共通であり、第一著者は主に会話文の説明と練習を担当した。統制群クラスの全学期の授業の流れは図3のとおりである。

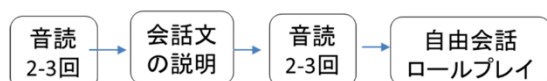


図3 シャドーイングを取り入れてない授業の流れ

統制群のクラスと実験群のクラスの授業の違いは、授業中にシャドーイングの導入の有無である。実験群のクラスの学習者のスピーキング力と比較するために、統制群のクラスに後期の期末テストのみにプレゼンテーションを実施した。なお、プレゼンテーションの内容と形式は実験群のクラスと同じである。

学習者のプレゼンテーションに対して、グループメンバーによる評価・母語話者(教師・教室外の母語話者)による評価と、自己評価を含んだスピーキング活動に関するアンケート調査を行った。評価項目や評価基準は実験群と同じである。

教師及び母語話者による評価は期末テストの成績とされた。実験群クラスの平均点は80点であるが、統制群クラス全体の平均点は60点にとどまっている。また母語話者によると、統制群学習者の発表内容が短

く、字数が少ない、学習者に「話そう、伝えよう」という意欲が薄い。その他、統制群が実験群と同じように中国語を8ヶ月学習していたが、統制群クラス全体の水準は半年しか学習していないような印象を母語話者に与えた。

アンケート調査では、「本日の活動についての感想」の項目に、40人のうち、20人が「緊張・不安」と挙げており、16人は「楽しかった」と表現し、4人は「発音は難しかった」または「わからない」と記入している。この結果から、学習者は中国語を8ヶ月学習していても、はじめてプレゼンテーションを行うと、中国語に対する不安が強く存在していることがわかった。これに対して、前期からプレゼンテーションを取り入れた実験群の学習者にその不安は、後期になると大幅に軽減された。ここから、早期にプレゼンテーションを導入することは、不安の軽減に効果があると考えられる。

上記の実験群と統制群のプレゼンテーションの結果を比較することを通して、早期かつ継続的にシャドーイングとプレゼンテーションを実施することは、早い段階に学習者の不安や緊張感を緩和し、自信をつけることができ、また、学習者の発音の正確率を高め、発話量を増やし、学習意欲を高める効果があることを示唆している。

5. 終わりに

本研究では、初級中国語の授業においてシャドーイングとプレゼンテーションを中心としたスピーキング活動を取り入れたことによる効果を検証した。この2つの手法の組み合わせにより、初期段階に学習者が中国語を使用して話す際、不安や緊張、自信のなさが多くみられるものの、継続的にシャドーイングとプレゼンテーションを実施することで、学習者が中国語を話すときの不安が軽減され、緊張が緩和され、自信がつけられるようになり、学習者のスピーキング力向上に対する効果が見られた。また、シャドーイングを中心とした読む活動を通して、学習者は語彙・文法知識を長期的に記憶することができたという効果も見られた。さらに、シャドーイングとプレゼンテーションを取り入れていないクラスとの比較により、初級中国語授業において早期かつ継続的にシャドーイングとスピーキング活動を取り入れることが学習者の中国語発音の正確率を高め、発話量を増やし、中国語に対する不安を早い段階に軽減することができ、中国語で話す意欲を強めることに効果があることが示唆された。

6. 今後の課題

本研究では、初級中国語授業において、シャドーイングとプレゼンテーションの組み合わせにより、学習者のスピーキング力にいかなる効果をもたらしたかを、主にアンケート調査の結果に基づいて考察したが、この2つの手法がスピーキング力といかなる相関関係があるのかは他稿に譲りたい。また、本研究ではプレゼンテーションのテーマは教師が選定したが、学習者が調査を行い、学習者のニーズに基づいて選定する方が望ましいと考える。さらに、本研究の実践では、プレゼンテーションをスピーキング活動の一環として、前期と後期の期末テストの2回しか行えなかった。今後はプレゼンテーションを実施する回数や頻度などを考慮し、継続的にプレゼンテーションの効果を考察していきたい。

謝辞：本研究は基盤研究(c)「遠隔地の外国語話者との協働による外国語スピーキング授業の充実化の研究」(代表者：坪田康 課題番号：16k02882)の助成研究の一部である。

文 献

- [1] 馮蘊澤, “中国語の音声”, 白帝社, 2007 年
- [2] 平井勝利, “教師のための中国語音声学” 白帝社, 2012 年
- [3] 荒川清秀, “動詞を中心にした中国語文法論集”, 白帝社, 2015 年
- [4] 劉巖, “談話空間における文脈指示”, 京都大学学術出版会, 2015 年
- [5] 曲明, “中国語学習者を対象にしたスピーキングテスト評価尺度の開発”, 外国語教育研究, 第 19 巻, pp.39-57, 2016 年
- [6] 奥水優, “中国語の教え方・学び方ー中国語科教育法概説ー”, 日本大学文理学部, 2005 年
- [7] 佐野富士子, “文献から見る第二言語習得研究”, 開拓社, 2005 年
- [8] 門田修平, “インプットをアウトプットにつなぐシャドーイング：理論と実践の連携”, 2011 年
- [9] 飯野厚 “音読・シャドーイングがスピーキングに与える効果”, 中部地区英語教育学会紀要, pp.37-42, 2014 年
- [10] 趙菁 “シャドーイング法の初級中国語教育への応用ー教室におけるシャドーイングの実践を中心にー”, 外国語教育フォーラム, pp.35-48, 2009 年
- [11] 張 文青, “中国語の声調学習におけるシャドーイング練習法の持続的効果の実証的研究：音声知覚と産出の向上を目指して”, 通訳翻訳研究 (17), pp.69-92, 2017 年
- [12] 築山さおり, “初中級日本語学習者の運用力向上を目的としたシャドーイングの活用について”, 同志社大学日本語・日本文化研究 第 11 号, pp.39-57, 2013 年
- [13] 武末裕子, “L2 としてのフランス語によるプレゼンテーション活動から考察するリスニング・スピーキングスキル”, 西南学院大学学術研究所フランス語フランス文学論集, 第 62 号, pp.67-91, 2019 年
- [14] 藤田玲子・山形亜子・竹中肇子, “学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性”, 東京

経済大学人文自然科学論集, 第 128 号, pp.36-53, 2009 年

[15] 加藤康代, 祝玉深, 坪田康, “日本語学習者による自己・ピア・第 3 者評価からの学び: ビデオ制作による遠隔地間大学交流より”, 日本教育工学会論文誌, 37(2), pp.165-176, 2013 年

[16] 門田修平, “シャドーイングと音読の科学”, コスモピア株式会社, 2007 年

付録

資料 1 前期授業アンケート用紙

中国語授業アンケート(前期) 学籍番号 _____ 名前 _____
1、大学で中国語の授業を選択したのはなぜですか。
2、中国語を学ぶのはどうですか。それはなぜですか。
3、中国語を話すことに対してどのような感情を持っていますか。(怖い、緊張する、楽しそう、わくわく等)
4、中国語で話ができるようになるために、どのような訓練が効率的・効率的だと思いますか。具体的な理由とともに教えてください。
5、将来、中国語を利用する機会があると思いますか。具体的なシーンを想像して書いてください。
6、今日の活動の感想を何でもいいので書いてください。
ご協力ありがとうございました。

資料 2 後期授業アンケート用紙

中国語授業アンケート(後期) 学籍番号 _____ 名前 _____ 1、中国語を1年間勉強して、その感想を何でもいいので書いてください。 2、本日の発表の感想はどうでしたか。よくできたところや、もうちょっと頑張りたいと思うところなど、教えてください。 3、中国語の授業ではスピーキングの練習が十分だと思いますか。以下の3つの選択肢から一つを選んで、具体的な理由を教えてください。(A:十分できた、B:普通にできた。C:できていない) 4、前期と比べて、上達したと感じたところを具体的に教えてください。(話す、聞く、読む、書くことなど) 5、中国語の話す能力を高めるために、どうすれば最も有効だと思いますか。 6、もしまた中国語授業を受講するならば、どのような授業を受けたいですか。授業の構成や内容など何でもいいので、書いてください ご協力ありがとうございました。
--